

「広島派遣で思ったこと」

日高市立高萩小学校 柿沼 瑛祐

ぼくは小学三年生の時に広島で戦争があったことを知りました。戦争のことを正しく知りたいと思い、いつか広島へ行ってみたいと考えていました。だから六年生になって、このようなチャンスを得たことに感謝します。ぼくは埼玉で原爆絵画展を見に行きました。があります。ぼくはその絵を見て、怖くてたまらず、目をふせてしまいました。だから、広島へ行く前日は楽しみというよりも、ぼくは広島でどんな気持ちになるのだろう？と不安な気持ちがたくさんありました。

一日目は平和記念資料館へ行きました。原爆は一瞬にして広島のを焼きつくし、人々の命をうばい、さらに被爆という大きな傷を残したことを伝えているそのひとつひとつに重みを感じました。「これが戦争なんだ...」。ぼくは心の奥の方が苦しくて、ぼくの心臓がドクドクするのを感じました。ぼくは「どう

しよう。ニわい！という気持ちだけでした。
二日目には、第七九回広島平和記念式典へ
参加しました。式典には日本の首相を始め、
たくさんの方が世界中から集まり、また注目
されていて、二人になにも多くの人が平和を願
っているのにな、どうして今も戦争や差別があ
るのだろうか？と不思議に思いました。そして
式典の後には子ども平和のつどいがありました。
た。ぼくは二二での被爆体験者のお話とそれ
を高校生の美術部の方が描いた絵が一番心に
深く残りました。被爆体験者の女性は、工場
にいた時に原爆にあい、足にけがをしている
中、友だちを助け逃げたそうです。死体がゴ
ロゴロしていてよけるすき間がないために時
にはそれをふみながら逃げる人もいたそうで
す。その感触はドロドロしていたそうです。
ぼくは怖くて仕方ありませんでした。さらに
その被爆体験者のお話を元に高校生が描いた
絵が怖すぎてしまい、ちやんと見続けることが
できませんでした。二人な中を生きようとし

てきたこと、そしてたくさん笑顔がうばわ
れた。この出来事は「戦争いけなく」という
簡単な言葉ではすまされないとぼくは思いま
した。資料館には「人類と核兵器は共存でき
ません。また同じことはいいけない。被
爆者の思いを受け止め引きつづくとありまし
た。ぼくは思いました。戦争を後世に伝える
ために被爆体験者がお話をするということは
その度につらい経験を思い出さなくてはいい
ないということです。ぼくはそのお話を聞い
たひとりとして目をふせてはいけません。戦
争を経験した方々に敬意をもつて戦争にフ
ィーデンする役目があります。核戦争に勝者はい
ません。「ノーモア・ヒロシマ」を世界に。
戦後から七十九年がたつて、日本はきつと七
十年前には想像できなかった暮らしになつて
いるはずですよ。けれど、今世界をみると平和
ではありません。平和は願うだけではかない
ません。ぼくは平和を願い、実現する人にな
らなくにはいけなさと強く思いました。